わが人生の転機

心に残る ひと言・人・作品

リレートーク❼

宗次徳二氏は著名な経営者だが、その半生は転機の連続。転居は数知れず、子供のころから日々を必死に生き、小さな目標を達成しつつ「カレーハウスＣｏＣｏ壱番屋」を創業し、一代で大企業に育て上げた。ＮＰＯ法人イエロー・エンジェル理事長、音楽の殿堂「宗次ホール」オーナーでもある。悲壮な幼少期を経ながら「貧しさを苦労と思わず、人をうらやむこともなく、能天気でした」と淡々と語る。何事にも一途。成功者となってからはひたすら社会に貢献、名前の「徳」を啓蒙し続けている。

カレーハウスCoCo壱番屋　創業者

宗次 徳二さん

宗次氏の幼少期は凄絶、苦難の生活ぶりは想像を超える。宗次氏はそれを包み隠すことなく、まるで懐かしい昔話のように話す。1948年10月、石川県能登町の生まれとされる。生後間もなく兵庫県尼崎市の孤児院に預けられ、３歳の時に雑貨商の宗次夫妻の養子となる。

「私生児として生んでもらいましたが、戸籍もあり、幸せでした。尼崎の記憶はありませんね。でも父が競輪にのめり込んで１年後くらいに夜逃げをして岡山に。間借りの部屋に辿り着いた日だったか、暗い道をとぼとぼと歩いていたのが、人生最初の記憶です」

岡山での３人暮らしは好転せず、よくわからない理由で、養父に棒で叩かれるなど“虐待”された。そして、養母が失踪。宗次氏が８歳の時、また３人一緒に住むことになり、養父と岡山から夜行列車で名古屋へ。

「父の暴力は日常茶飯でしたね。５歳ぐらいからの日課はたばこの吸い殻拾いでした。パチンコ屋さんで拾うのですが、少ないと叩かれました。電気代が払えず、常にろうそくの生活で、食べ物もお米は５，６回に１回。草むらに群生していたイタドリが主食の時も。そんな生活は中学２，３年まで続きました。競輪場で捨てられた車券から当たり券を探せと言われて数百回やりましたが、当然外れ券ばかり。でも、そんな生活も特別に嫌だとか、自分は何て不幸なんだ、と思ったことがありません。父の生活態度から学んでいたのかもしれません」

宗次が養子としてもらわれた当時

小学生のころ、たまに養父から20円もらい、魚肉ソーセージを買い、ランチクラッカーを食べて少しだけ空腹を満たした。ただ１度だけ、クリスマスの時にケーキを買う同級生を後ろの方から見て羨ましく思ったという。外食の経験は中学に入る前のこと。別の所に住んでいた養母が名古屋・栄でおでんの屋台を出したことがあり、手伝った翌日にカレーライスとぜんざいを食べさせてもらった。

「家賃を払えず住まいは転々。中学生の時、東区の富士中学に通っていた時の部屋は大家さんの家の土間。土の上のゴザに布団を敷いて寝ていました。勉強もしなかったですね。高校は私学が受かったが、入学金が払えず、親にも言わずに諦めました。県立小牧高校が受かり、中学を卒業するころ、父が胃がんで入院、その年の７月に亡くなりました。それから母親と北区で生活。母は会社の賄いの仕事に就き、食生活は一変しましたね。母が余り物を持ち帰り、ウナギ12匹が来た日もありました」

高校時代は豆腐屋でアルバイト。毎朝店で働いた後に登校する日々で、学費は自分で稼いだ。東京オリンピックで東洋の魔女と言われた日本女子のバレーチームが金メダルを取った余韻があり、バレー部に入部。家には電気もついて中古テレビもあった。宗次氏はかつてないほど心身ともに健康的で充実した